



刻歩極頂

長井市立西根小学校
学校だより第11号
令和4年10月4日

「刻歩極頂」（こくほきょくちょう） 一步一步の歩みを大切に 頂上にたどり着く
長井市初代名誉市民 孫田 秀春 博士 揮毫

創立記念日（102周年）おめでとう

9月28日は、西根小学校の103回目の創立記念日（102周年）。

今年も、地域の方からたくさんのひまわりの花をいただき、誠にありがとうございました。折しも、昨年、本校は高橋都哉氏の「ひまわり」をご寄贈いただいたところです。太陽に向かって元気よく咲くひまわりのようにすくすくと成長する子供たちを、職員一同、温かく支えていきたいと思ひます。

今年には集会の中で創立記念日をお祝ひしました。校長講話は次のような内容です。

西根小学校は、102年前の大正9年（1920年）に開校しました。

学校の歴史はもう少し古くて、今から141年前の明治14年の9月28日、草岡新町に草岡学校が建てられました。その後、川原沢学校と一緒にになり、今の西根地区コミュニティセンターや児童センターがある場所に草岡学校が建てられました。その後、草岡学校は、寺泉学校、勸進代学校と一緒にになり、西根小学校になりました。それが102年前の大正9年（1920年）、ここから数えて102歳です。

体育館に「校章」があります。学校の「学」の字を中心に、カタカナの「ニ」の字が4つで「西」を表し、漢字の「小」の字をとがらせてペンを表します。ペンが4つあるのは、「寺泉」「川原沢」「草岡」「勸進代」が一つにまとまろうという意味。みんな仲良く学び合おうという心が表れている校章です。

校歌は、昭和6年（91年前）に第3代校長の高世継一先生が歌詞を書いて、寺泉上郷出身の軍楽隊指揮者山崎藤得先生が曲をつけてできたものです。校歌の3番の歌詞に「嗚呼一千の同胞よ」とありますが、昭和6年の西根小学校の児童数は初めて千人を超え、1030人になりました。昭和の初め頃、第二次世界大戦前が西根小学校の児童数がいちばん多かった頃です。

現在の西根小学校の校舎は、昭和58年（39年前）にできました。みなさんが一生懸命掃除をしているので、年数に対してきれいな校舎だと思います。長井北中学校、長井南中学校は、その前の年に開校し、西根中学校は閉校になりました。そして、去年と一昨年、創立100周年事業が行われました。すべり台やターザンロープの整備、記念式典、記念コンサート、記念植樹もあって、いっそう充実した西根小学校になりました。みなさんは、その環境の中で学習しています。

100年以上の歴史を振り返ると、いろんなことが大きく変わりました。明治・大正の頃は、まだランドセルがなくて、風呂敷に勉強道具を包んで登校しました。明治の頃は、石板に石のチョークみたいな物（石筆）で字を書き、鉛筆やノートは、明治の終り頃から使うようになったといわれています。明治・大正の頃の6年生の教科書を少し読みます。（文部省尋常小學校讀本卷十二「第十二課 我が國の農業」より 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起源なり。）これは、計算する時に使うそろばん。4玉になったのが昭和になってからです。そして、私が子供の頃の教科書、昭和の時代の後半です。ちょっと小さいですね。そして、現代の教科書になりました。さらに、今はタブレットも使います。みなさん、ますます賢い子に成長してほしいと思ひます。

しかし、昔も今も変わらないことがあります。それはこの校章に表れていると思ひます。「4つの地区が一つにまとまって、みんな仲良く学び合おう」という心。それは、昔から、そしてこれからも、決して変わらない大切なことです。また、子供たちを賢く元気に育てたいという地域の方々の優しく強い思ひ。決して忘れずに、心も体も健康で、勉強もスポーツもがんばる、ますますいい子に成長しましょう。

「縄文まつり」に向かって

10月9日（日）に開催される「縄文まつり」に向かって練習が進んでいます。オヤブンさんのご指導のもと、全5曲、子供たちの息も合い、気持ちに乗ってきました。

また、4年生が作成した「縄文まつり」のポスター2種類が10/1（土）からフラワー長井線の吊り広告に掲載されています。「おらんだラジオ」では、10/4（火）の「けさらじ」（8：25～8：55）、10/5（水）の「ゆうらじ」（17：25～17：45）に、「縄文まつり」PRのCMが放送されます。いずれも、「おらんだラジオ」の方々から直接ご指導いただき、取り組んできました。子供たちの地域への発信です。いよいよ本番も間近。楽しみになってきました！



9月30日の気合の入った練習の様子

<ミニコラム> 子供の心とことばを育てるために（その5）

「自己肯定感」「自己有用感」について

諸富祥彦氏は、著作の中で次のようにいいます。

「すべての問題行動の背景にあるのは、自尊感情の傷つき、自己肯定感の低下である。『どうせ私は』『どうせ僕は』という心のつぶやきである。」

「自己肯定感を育てる最大のポイントは、『私はこのクラスで必要とされている』『私はこのクラスで役に立つことができている』という感覚、つまり自己有用感を育てていくことである。」

もちろん、教師向けの著作の言葉ですから、学校での場合について述べています。家庭での場合は、「このクラスで」を「この家で」とか「おとうさん・おかあさんに」と読み替えます。

私は長年、教師をやっている、「自己肯定感」「自己有用感」の低い子供が思った以上に多いことを痛感しています。子供たちの問題行動の根本が、そこにつながるものがあまりにも多いのです。

佐藤幸司氏は、著作の中で次のようにいいます。

「子どもを勇気づける“とっておきの言葉”があります。それは、『あなたなら、大丈夫。』という言葉です。悩みごとを抱えた子がいたら、『〇〇さんなら、大丈夫。必ず乗り越えられるよ。』と、静かに真剣に話してください。（中略）子どもは、この言葉を聞いて、「この大人（教師）は、自分のことを信じてくれている。」と感じます。そして、この言葉に勇気づけられて、次の目標に向かって一歩前に進んでいけるようになります。」

子供に対して、「あなたのことが必要なんだ」というメッセージを繰り返し繰り返し伝え続けること、たとえ子供に裏切られても裏切られても粘り強く伝え続けること。それが子供の心を育てます。

文献：『教師が使えるカウンセリングテクニック80』、諸富祥彦著、図書文化社

『クラスが素直に動き出す プロの教師の子どもの心のつかみ方』、佐藤幸司著、学陽書房